

大阪大学大学院生命機能研究科

## 第9回 学生主催若手合宿研究交流会

報告書

第9回学生主催若手合宿委員会

## 1. 本合宿について

### <合宿の目的>

学生主催若手合宿研究交流会は、イノベーションの礎となり生命機能研究科の理念でもある「異分野融合」を促進するために、学生・若手研究者が油袋となった研究交流を目的として開催されてきた。今年度は、その目的を更に広範囲に広げ、生命分野だけでなく情報科学や基礎工学の分野を横断した異分野融合を目的として開催した。

第9回となる今回の合宿では、「DEER WILL WITNESS “INNOVATION”」をテーマとして掲げた。これは、様々な分野の研究者が合宿の開催地である奈良に集まることで、新たなイノベーションにつながる“おもしろい”融合研究の種を創造することを意味している。

### <合宿の概要>

本合宿は生命機能研究科の学生と HW 履修生が中心となり、企画・運営のほぼ全てを取り仕切っている。今回の第九回学生主催若手合宿研究交流会は、7月15日(水)から17日(金)までの三日間、奈良県 天の香久山の麓で開催した。今年の合宿参加者は、75名であり、そのうち海外から招聘した参加者が16名、沖縄科学技術大学院大学(OIST)から招聘した参加者が1名である。大阪大学に在学中の留学生も含めると外国人参加者は30名で、全体の4割にも上った。また、今年は情報科学研究科、基礎工学研究科からの募集も大々的に行ったことから、生命機能からの参加者が35名、情報科学からの参加者が16名、基礎工からの参加者が6名と、より様々な分野の研究交流ができる環境となった。

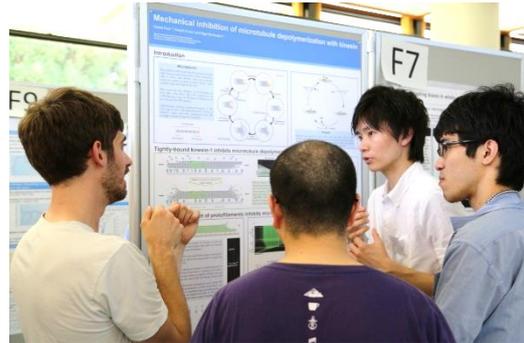
合宿の構成は、ポスターセッション、グループディスカッション、特別講演、エクスカージョンの4つのプログラムを企画した。構成は例年と同様であるが、例年以上に異分野交流ができる工夫を随所に凝らした。ポスターセッションでは、各個人が様々な分野の発表を聞けるよう、発表時間を8タームに区切り、自分の発表時間以外は自由に回れるようにした。グループディスカッションでは、実際に融合研究の創発という少し難しいテーマ設定をしたが、自分の研究を専門分野の中の立ち位置で眺めるだけでなく、“科学”という括りの中でどのような意味を成すかという視点に立てる機会を提供した。特別講演では、それぞれの専門分野に捉われず、科学者としてどのように社会問題に向き合っていくかという議題についてのワークショップと、融合研究の現代社会における可能性とその方法論を、講師自らの体験も踏まえた講演を取り入れた。エクスカージョンは、会の期間中に台風が接近していたため、参加者の安全を第一に考慮し、残念ながら中止した。そのため、今回の報告では、エクスカージョンの報告は除いてある。

## 2. ポスターセッション

### <目的>

本年度のポスターセッションでは主に以下の3点を目的とした。

1. 学会などで見られるようなポスター発表形式で研究発表を行うことにより、学会発表の練習となること
2. 異分野の研究者に対して自らの研究について分かりやすく研究発表するためにはどのように工夫すれば良いかを知ること
3. 様々な分野の研究者の研究発表を聞くことで、それまでになかった視点や興味を獲得すること



### <内容>

発表者にはそれぞれ40分の発表時間を設けた。また、合計でポスターセッション終了後には、ベストポスターを三枚選んで投票してもらい、閉会式にてポスター賞（1位～3位）の表彰を行った。

### <実施結果・考察>

例年通り非常に好評であった。実際、5段階評価で全体平均4.0点であった。参加者からのコメントとして「時間をもっとあればよかった」「幅広い分野を知ることができて良かった」といったようなものがあった。一方で、「ポスターの配置が悪かった」「気温が暑かった」という意見があった。

### <改善点>

ポスターセッション全体では非常に好評であり、良かったように思う。しかしながら、「時間をもっとあればよかった」という意見があるように、もう少し余裕を持たせても良かったように思う。また、「ポスターの配置が悪く、人があまりこなかった」「気温が暑かった」という意見にもあるように、ポスターの配置を配慮するべきであった。今回はホテルの都合上仕方がなかったが、ホテル場所を決定する時点からポスター発表を行うのであれば考慮しておく必要があると思う。また、室内気温が高かった問題については、当日ホテル側から冷房機が故障しているという報告を受けて問題が発覚した。扇風機を使用すること、飲料水を設置することでカバーしたが、参加者の健康面を考慮して、常に想定外の事態が生じることを念頭にいれる必要があるように思った。

### 3. グループディスカッション

#### <目的>

本年度のグループディスカッションでは主に以下の2点を目的とした。

1. 「融合研究」について自由に考えることで、融合研究の難しさや楽しさを知ること
2. 異分野の研究者とのディスカッションを通じて、様々な視点を獲得すること



#### <内容>

様々な分野の研究者に分野融合によるディスカッションを通じて、融合研究に関する革新的なアイデアの創出に努めてもらった。グループディスカッションは合計9時間と設定した。この時間内で、A4資料を用いて自らの研究をグループ内の研究者に対して発表する時間、融合研究についてグループ内で自由に考える時間、参加者全体にグループ内で生まれた融合研究のアイデアを共有する時間を設けた。

#### <実施結果・考察>

最終の参加者全体に対する各々のグループの発表では、非常におもしろい発表や白熱した議論がなされていたように思う。実際アンケートから「良い経験、有意義な時間になった」「海外学生と共同で作業することができて良かった」といった意見が寄せられていた。一方で、5段階評価で全体平均3.2点であった。「設定時間が長すぎる」「テーマが難しい」といったような意見も寄せられた。確かに、これらの問題からそれぞれのグループの作業スピードに差が生まれており、全てのグループで常に積極的なディスカッションが行われていなかったように思う。

#### <改善点>

「テーマ設定」という問題がすべてであるように感じる。今回のディスカッションでは、それぞれの参加者の積極性や柔軟性といった部分に期待して自由に融合研究について議論してもらおうと考えていたが、もう少し明確なテーマ設定と考え方のアウトラインを設定する必要があった。

## 4. 特別講演

### <目的>

本企画は特別講演 1・2 の二部構成で行なわれた。

特別講演 1 では、社会と科学の関わりについて学ぶことを目的として、大阪大学コミュニケーションデザインセンターで科学コミュニケーションについて研究に取り組んでいらっしゃる小林傳司先生にご講演頂いた。

現代では科学技術の発展に伴いリスクが増大し、様々な社会問題を引き起こすようになった。その中で、科学の専門家は科学技術だけでは解決できないトランス・サイエンスな問題に対しても意見を求められるようになった。このような時代において、我々科学に携わる者のあるべき姿を見つめ直すことを目的とした。

特別講演 2 では、本合宿の目標でもある”異分野融合”をいかにして行なうか学ぶことを目的として、大阪大学情報科学研究科でバイオ・ダイナミクスの研究に取り組んでいらっしゃる細田一史先生にご講演頂いた。

単一の専門知識だけでは対処できない複雑かつ巨大な問題に対し、異分野融合の必要性が強調されている中、学際的な研究者である細田先生から融合研究の方法論を具体的に学ぶことを目的とした。

### <実施内容>

#### 特別講演 1

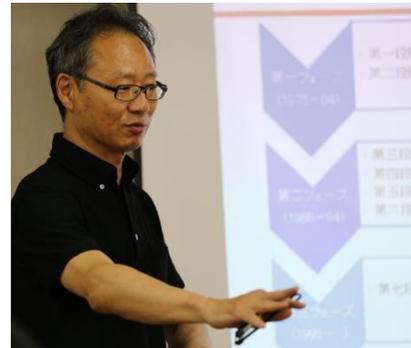
日時: 7/15(水) 15:00~17:00

講演者: 小林 傳司

*Professor, Center for the study of communication-design,*

*Osaka University, Osaka*

演題: 「3.11 とトランスサイエンス」(英題: 3.11 and Trans-Science)



#### 特別講演 2

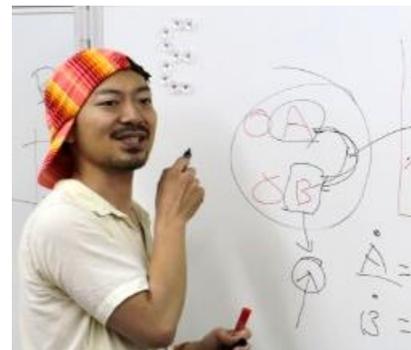
日時: 7/16(木) 13:00~15:00

講演者: 細田 一史

*Visiting associate professor, Department of Bioinformatic Engineering,*

*Osaka University, Osaka*

演題: 「Interdisciplinary research: Why and how」



## <実施結果>

### 特別講演 1

トランス・サイエンスな問題として象徴的な事件であった 3.11 福島第一原発事故を題材としてご講演頂き、科学の専門家が社会の中でどのような役割を求められるのかについて考え直した。前半の講義では様々なデータや事例を過去の科学技術が起こしてきた問題から学び、後半のディスカッションでは「科学者は、社会に適用される科学技術について何を助言すべきか」について議論を行なった。

アンケートの「満足」「やや満足」を合わせた割合は 71%と高く、「普段考えたことのない視点から科学について議論できた」、「興味深い話だった」等の声が聞かれた。一方「どちらとも言えない」という回答が 15%となり、「内容が難しいので、議論が深まらなかった」、「ポストイットディスカッション等の方が良かったのでは」という意見が見られた。

### 特別講演 2

細田先生から、現在なぜ融合研究が必要なのか、そして融合研究を行なう上で何が必要であり重要なことなのかを、実際に融合研究を行なってきた細田先生の経験に基づいてお話頂いた。去年までとは異なり、生命のみならず情報・工学の多分野を交えた今回の合宿では、いかにして分野の異なる人間と融合していくのかについての知見が、特に講演前後の異分野融合研究を目指すワークショップなどにおいても活かされたと考える。

アンケートでは平均 3.2 点であった。「話が興味深く先生と更に議論したい」などの意見がある一方で、「内容が英語で分かりにくかった」、「もっと実際に行なっている研究について聞きたかった」等の意見があった。

## <考察>

特別講演 1 に関しては、社会の中で科学者が求められる役割について、具体的な事件を例に知ること、科学携わる者としての社会における責任や役割を見つめ直すきっかけになったと思われる。しかし、後半の議論では 1 グループ当たりの人数が多すぎたこともあり、グループ内での発言量に差が生まれてしまった。今後はグループを 8 人程度の規模にするか、ポストイットを使うなど発言が偏らない議論形式をこちらから指定すると改善が可能だと考える。

特別講演 2 に関しては、融合研究の必要性や方法論について知るきっかけとなり、本合宿の目的の一つである異分野融合を進めるきっかけになったと考える。しかし一方で、日本人学生からは英語での講演が聞き取れず理解できなかったという意見が多く見られた。これに関しては、事前に資料を配布することや、スライドには日本語も併記して頂くことなどを可能であれば今後お願いしたい。

また、講演日程や時間帯も重要であることが分かった。今後は参加者の状態を想定して、スケジュールを構成するよう検討したい。

## 5. 合宿イベント前後のワークショップに関して

### <目的と概要>

本イベントは、7月15日～17日に行われた「学生主催 若手研究交流合宿」（以下、若手合宿）の関連イベントとして開催された。合宿前後にイベントを開催することで、若手合宿の目的である「異分野交流」と「国際交流」をより効果的に実現することを目的とした。具体的には、以下の4つの企画を行った。

#### 1. Zuben Café:

HW履修生でネイティブスピーカーのZubenを講師にカジュアルな日常英語を学んだ。

#### 2. 研究プレゼンワークショップ 異分野に伝えるプレゼン術～基礎編～:

阪大リサーチアドミニスターの福島先生を講師に、異分野の大学院生に自身の研究ポスターを解り易く説明するワークショップを行った（日本語）。

#### 3. 英語プレゼンワークショップ 異分野に伝えるプレゼン術～実践編～:

英語で、自身の研究を異分野の学生に説明するワークショップを行った。

#### 4. ラボツアー:

HW関連研究科の代表的な研究室を訪問し、阪大で行われている様々な研究に触れた。

### <企画で得られた収穫>

Zuben Caféでは、合宿前に英語に慣れる良い機会となった。また、ネイティブが使う日常表現を実際に使ってみたことによって、合宿での外国人とのコミュニケーションのための良い肩慣らしになった、というような感想を参加者から複数得ることが出来た。

2つのワークショップは、自身の研究を異分野の学生に分かりやすく伝える難しさを体感できた。自身の研究の説明の仕方を見直す良い機会になった。また参加者から、異分野の学生が行っている研究内容を知る良い機会になった、との感想を得た。また、外国人が最初に集まって行うワークショップであったため、参加者からは、お互いの研究をしり打ち解ける良い機会となった、という感想を得た。

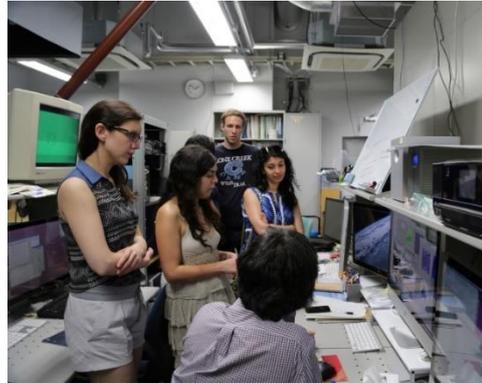
ラボツアーでは、普段は見ることのない異分野の研究の実状に触れることが出来た。所属学生が丁寧に説明してくれたため、異分野研究に対する興味をもつ良いきっかけとなったと思われる。



### <感想・反省点・今後の改善点>

Zuben Café は、普段練習する機会の少ない日常英語をネイティブに学べるという点で、良い企画だったと思う。コンテンツ自体も面白く、参加者が楽しみながら英語を使っていた。改善点としては、全体で話す時間が長く、一人当たりの話す時間が少し短く感じられたため、ペアワークを増やすなどして、参加者が英語を話せる時間をもっと長くすること、などが挙げられると思う。

事前ワークショップでは、当初の目的は「異分野の学生に対する説明を上達すること」であった。そのため、日本語のワークショップでは講師を招き、異分野コミュニケーションに関して学ぶ予定だった。しかし、講師の方の講演が、ワークショップの



内容とあまりマッチしていなかったのと、ワークショップに対するフィードバックもあまりなかったことから、当初の狙い通りにはいかなかった。もっとワークショップを専門にやっている講師等と呼ぶべきだったと思う。英語のワークショップでは、日本人の参加者をもっと集まることを予想していたため、「英語」での発表を練習できる場を提供する狙いがあった。

しかし、実際の参加者はほとんどが外国人で、「英語」を使うことによる収穫は少なかった。

事前ワークショップに共通する改善点として、参加を増やすことが挙げられる。また、異分野学生への説明の上達を目的としていたため、プレゼン手法自体に焦点を当てたワークショップを試みていた。しかし、参加者からの感想では、「異分野の研究を知れてよかった」というような研究内容に対するものが多かった。



なので、もっと異分野間で研究内容を議論することを目的としたワークショップとし、異分野の研究内容を知る過程で、「副産物的に異分野間のコミュニケーションが上達する」ワークショップを試みても良かったと思う。

ラボツアーでは、とても満足度の高い参加者が多かったように思われる。しかし、少数ではあるが、訪問先が自分の興味とマッチしていなかったため、あまり楽しめなかった人がいたようだ。改善点としては、事前に訪問希望ラボを調査するなどして、より参加者の興味と合ったラボツアーを提供することだと思ふ。

全体的な反省点として、準備の遅さと、告知開始の遅さ、参加者集めの努力が少なかったことが挙げられる。また、ワークショップの目的に対して、コンテンツがあまりマッチしていない部分があった。企画の狙い自体は良かったと思われるため、次回以降は、時間に余裕を持ち、もっと内容を精査して企画を行えるようにしたい。

## 6. 総括

今回の合宿は、今までにない新しい取り組みを多く行った。まず、参加対象者について、前年度までの生命機能研究科の学生+HWの学生だけでなく、情報科学研究科の学生、基礎工学研究科の学生にも対象範囲を広げた。それに伴い、募集する海外学生についても、生命分野、情報分野、工学分野のそれぞれを専攻する海外学生を招聘した。次に、資金運営についても、学生自らが全て予算計画を立てて実行した。宿や備品レンタル業者とのやり取りや、イベントの細かい点のマネジメントも学生委員が行った。最後に、合宿前後日程にイベントも合宿委員が企画をした。合宿参加者にとって、より合宿を有意義なものにできるように、事前英語セミナーや、研究発表セミナーを行った。また、招聘した海外学生に大阪大学の一流の研究を知ってもらうために、合宿後にラボツアーを開催した。

新しい取り組みを行ったことの弊害として、合宿委員にかなり負担がかかってしまったことが挙げられる。今回の合宿委員の人数が少なかったこともあり、各々がしっかり動いていても、合宿運営に関わる一つ一つの事柄に対して綿密な準備をすることができず、合宿直前はかなりバタついてしまった。合宿前後のイベントは、特に準備が遅れてしまい、しっかりと広報や内容を詰めることができなかった。イベントに参加した学生からは、内容について満足しているという意見をもらったので、もっと準備に時間をかけることができれば、この合宿前後に行うイベントは、よりよい取り組みになるだろうと考える。

全体を通したアンケートの結果は、8割程度の参加者が「満足」「ほぼ満足」という結果であり、今回の会は参加者にとって満足のいくものとなったことを示している。また、本合宿の主要目的である『さまざまな分野の人との交流ができたか』という項目でも、8割弱程度の参加者が満足しているという結果であり、本合宿の目的は概ね達成できたのではないかと考える。一方で、『英語をつかってコミュニケーションできたか』という項目については、5割強しか満足できておらず、せっかくの国際交流の場である意義を達成することが難しかったことを示す。これは、英語に不慣れを感じている日本人学生のグループと海外学生のグループで懇親会中や食事中に分かれて交流を図ってしまうことが原因だろうと考える。そのため、事前に日本人向けに英語に対する抵抗をなくすワークショップを開催したり、合宿中のプログラムで、英語を使わなくても交流できるようなレクリエーションを取り入れ、日本人学生と海外学生の溝をなくしたりすることが今後必要である。



## <第9回 学生主催若手合宿研究交流会 実行委員紹介>

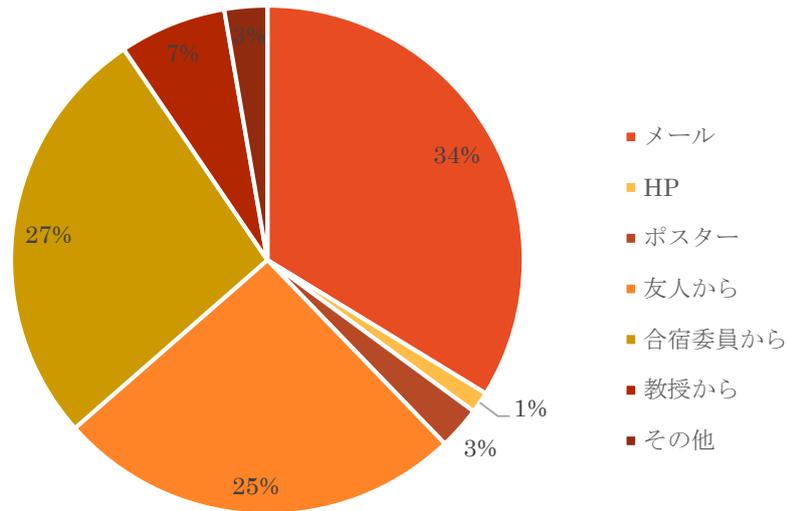
<u>名前</u>	<u>担当</u>	<u>学年</u>	<u>研究室</u>
澤田 莉沙	実行委員長	D3/5	近藤滋研
垣塚 太志	副実行委員長	D3/5	柳田研
竹本 健二	会計	D2/5	八木研
伊藤 忠弘	企画	D2/5	四方研
水山 遼	企画	D2/5	佐藤研
近藤 和彦	企画	D2/5	野田研
木村 聡志	企画	D1/5	小倉研
小森 隆弘	広報	M2	四方研(情報科学研究科)
Zuben Brown	企画&広報	D3/5	高木研

## <謝辞>

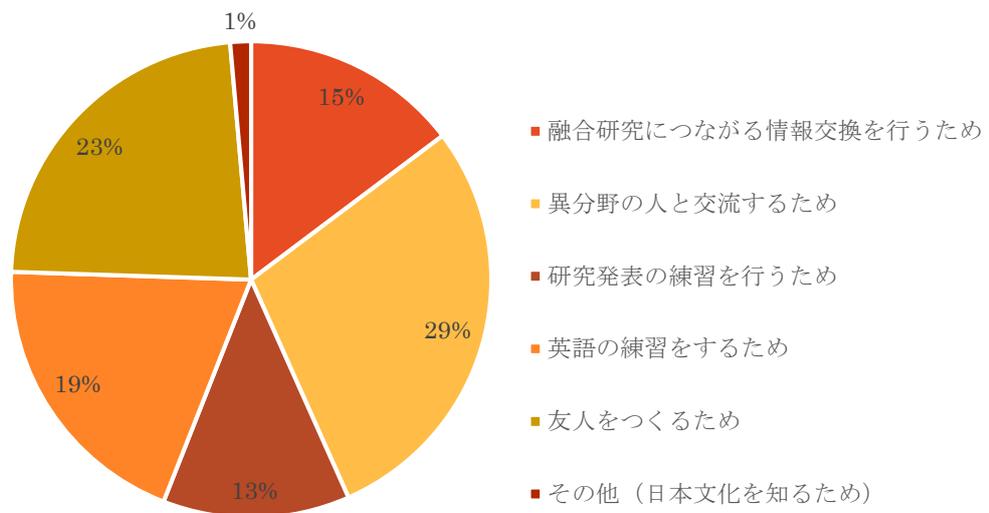
本合宿は、リーディング大学院ヒューマンウェアイノベーション博士課程プログラムと共に生命機能研究科の支援のもと開催されました。このような機会を与えてくださった難波先生、研究科長の仲野先生に心より感謝の意を表します。情報科学研究科、基礎工学研究科に募集対象を広げる際、快くお力添えの承諾をしてくださった西尾先生には、深く感謝致します。ヒューマンウェア特任准教授の細田先生には、終始暖かい声援と適切なお助言・お力添えをしていただきました。本当にありがとうございます。また、多くの海外研究者の招聘に協力してくださった先生方、新しい取り組みであるラボツアーの訪問研究先としてのお願いを快く引き受けてくださった研究室の方々、田中さんを始め企画室の方々、谷川さんを始めヒューマンウェア事務局の方々、そして合宿の開催に尽力してくださった全ての皆様に心から感謝致します。

## 7. 合宿アンケート結果

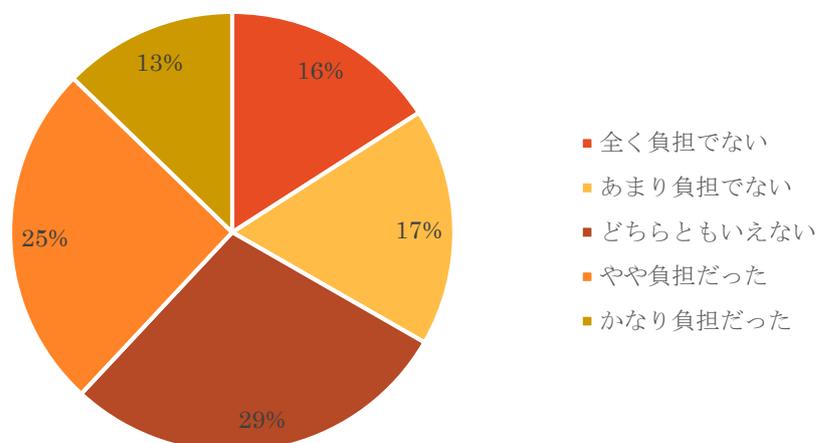
Q1. 合宿に参加しようと思ったきっかけはなにか。(複数回答可)



Q2. 合宿に参加した目的はなにか。(複数回答可)



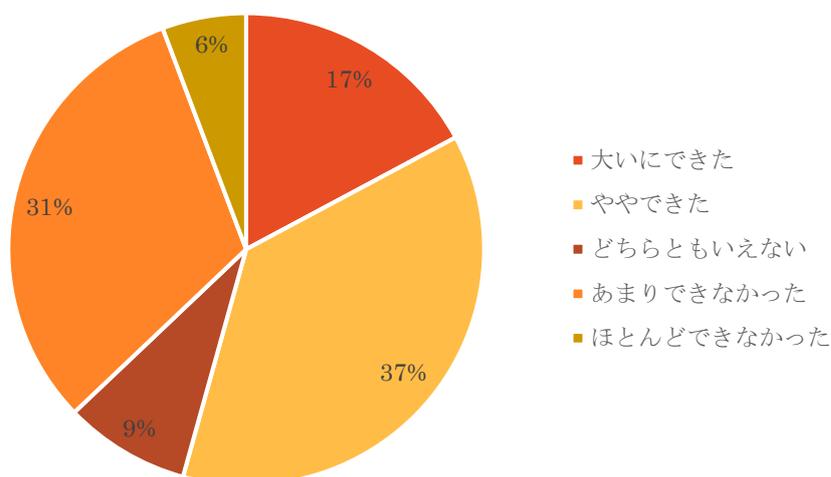
### Q3. ポスターなどの発表資料の準備は負担だったか



#### [考察]

負担であると答えた割合が4割程度を占めるのは、合宿参加者にM1 (D1/5)が多いため、初めての研究ポスター作製に手間取ったからではないかと考えられる。

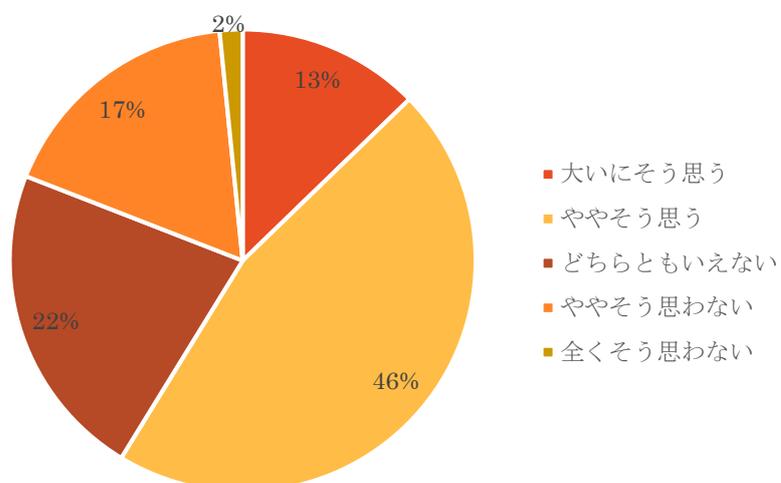
### Q4. 英語を使って十分なコミュニケーションはできたか



#### [考察]

毎回そうであるが、今回も懇親会や食事のときに、日本人グループと外国人グループで分かれてしまっていた。合宿の初めに、英語不慣れな人でもできるような簡単なゲームなどをして、アイスブレイクの時間をとる必要があるのかもしれない。

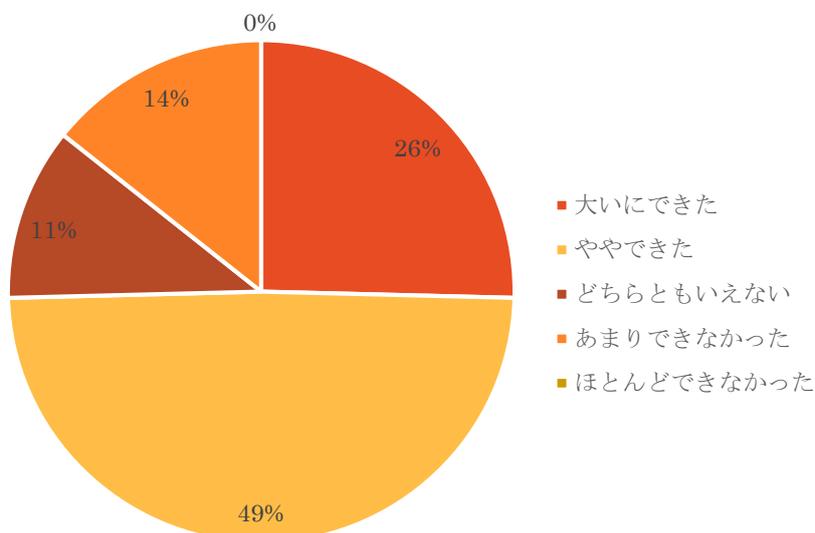
#### Q5. 自分の研究や考え方を他の分野の人に伝えられたか



#### [考察]

4割程度の人が「どちらともいえない」「そう思わない」と回答しているのは、やはり“英語”というのが、情報を伝達する障害となっているのではと考える。

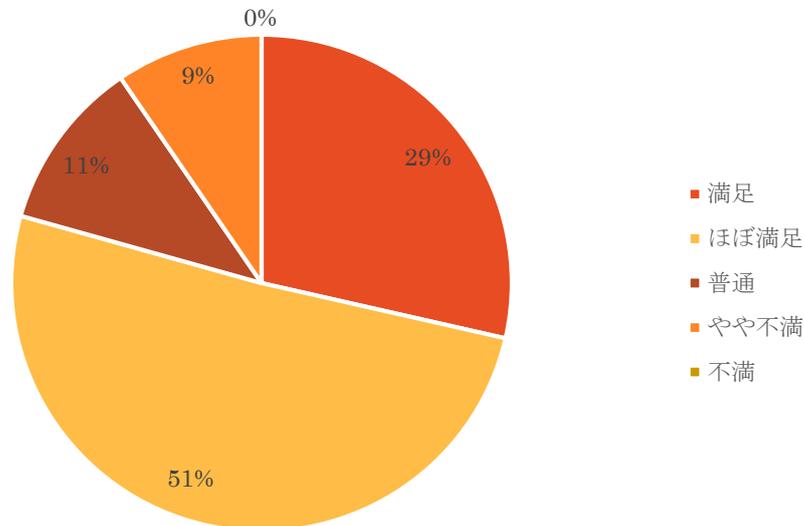
#### Q6. さまざまな分野の人と交流することはできたか



#### [考察]

75%程の概ね満足の結果が得られたが、今回の様な異分野融合に焦点を当てたプログラムにもかかわらず、あまりできなかったと答える参加者が2割程いるのは、懇親会や食事の時などに、やはり日本人/外国人グループで固まってしまったためだと考える。

## Q7. ポスターセッション



### [具体的なコメント]

十分にディスカッションができたから / 非常に有意義でした！もう少し時間が長くて良かったかもしれない / 異分野の研究に触れる機会がほとんどないので、新鮮で面白かったです / 暑かったがいい経験になった / 幅広い分野の人と交流できたが、奥の方のポスターだったので、人があまり来なかった / 時間がもう少しほしかった / やや短い / もうちょっとディスカッションの時間をポスターに回してもいいとおもった / 聞きたい発表が全部自分と同じグループだった/時間割を少しシンプルにしてほしかった / 20分での発表の厳しさと、もっと聞きたかった/もっといろいろなポスターをみたかった / テンポよく進んでいたと思った / 各人によって発表の時間が異なるので、全員の発表を聞けなかった / 誰も聞きに来なかった

According to cold year, projects are more professional there. / It was a big hot!

The poster area was very hot / good amount of time for each session

Lots of interesting areas of research / Enough chance to discuss on research

Very interesting but the planning seems rigor.

It is just good / It was great, many fields. / Nice way to discount research

It was possible to see most of the interesting posters

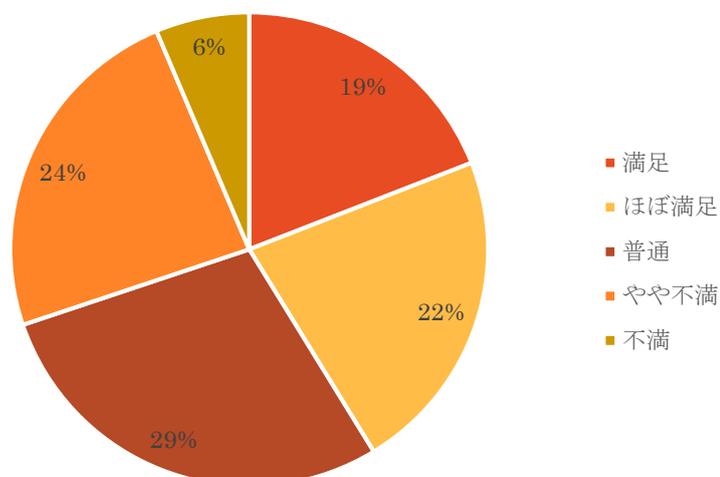
The time schedule was really fine / always nice to discuss researchers with people

Many great posters, good questions, plenty of space, lots of variety

Nice way to discount research. / I liked how slots for presenting were organised

Hind area was not convenient for us to see

## Q8. グループディスカッション



[具体的なコメント]

合宿中、日本人同士、外国人同士で集まってしまうが多かったので、このプログラムで日本人と外国人との合同作業ができてよかったと思います。しかし英語の未熟さをたたきつけられました。ほとんど発言できませんでした。 / 少し長かったときと短かったときがあったが、トータルとしてはちょうどだった / あまりにもかけ離れた研究内容の融合に苦勞したから。一つの問題に対して解決するディスカッションの方がもっと活発になっていたと思う。 / グループによって分野の偏りがあるように感じた / ディスカッションのテーマが丸投げされている状態だったので、もう少しオーガナイザー側からのサポートがほしかった。 / すべての人に話を振ってくれるファシリテーターをきちんと用意してほしかった / 具体的にどのように話し合ったらいいのか少し迷った / ちょうどよい時間だったと思う / 少し時間は長かったです。人数割合の都合上仕方なかったかもしれないですが、ほぼ生物系ばかりのグループで、「異分野感」は少なかったです。 / 有意義な時間だったと思います / あまり英語で話せなかった / もう少し専門的なことを話したかった / よいテーマが作れた / 途中で休憩がほしかった / **長すぎる**

Should improve a lot; because group work was so lazy and messy, we should set 4~5 theme before and discuss only. / For our group is good enough.

Group was very quiet, challenging to incorporate research one large scales

Lots of fun / Difficult to communicate / very fun and relax with various ideas

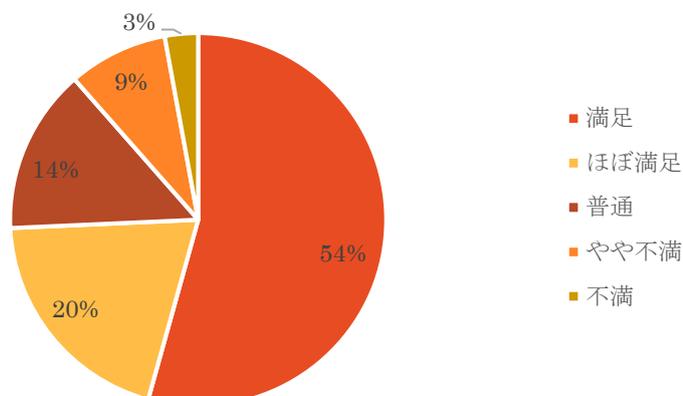
It is interesting / Very good, I just have some problem about my field to match different / Communication problem. / It was fun to connect different Ideas.

At some point, I didn't know let a group members how to fuse my idea with others.

Some more guidance is required. / It was a little bit too long

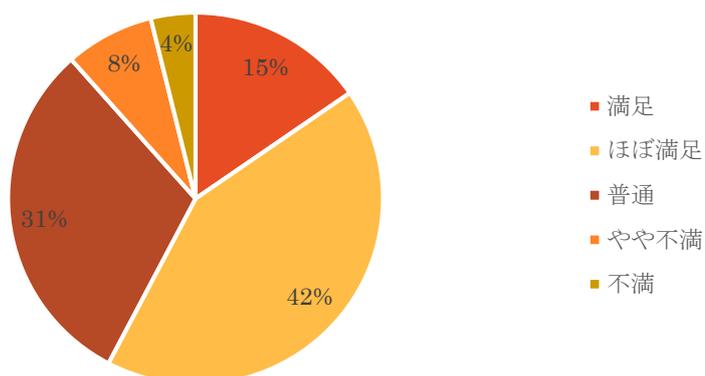
A common problem in ID research approach that force people to fuse their researches together under high light of "fields" by purpose without a common interest / question at first. / Very interesting but it went on very long

### Q9. 特別講演①：小林先生ワークショップ（日本人向け）



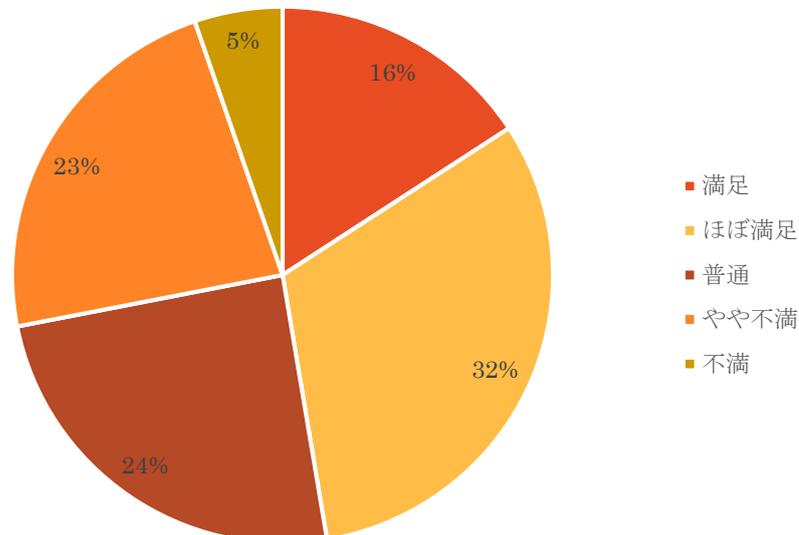
普段考えたことのない視点から科学について議論できた / 興味深い内容でした / 日本語で日本人のみだったので、つかの間の休息といった感じでした。三日間英語漬けは少しつらく、言いたいことを伝えることが英語ではできなかつたので、積極的に発言できてよかったなと思います。 / 小林先生のお話そのものはとても興味深かつたのに対し、ディスカッションの時間が準備不足でもったいなくなっていると感じるところがあつたのと、外国人を呼んでいるのにセパレートするところに違和感をもつた。 / 楽しかつた / 知識が増えた / 若干準備不足かと…。ポストイットディスカッションがいいのでは / 知らないことが多かつた / 何を話し合うのかあらかじめ教えてほしかつた。内容が難しいので、議論が深くならなかつた。 / おもしろかつた / ディスカッションの時間を含め、ちょうどよかつた / とても勉強になりました

### Q9. Social Discussion（英語話者向け）



It may ok I think / Enjoy a lot, discussion about something for often thought about / quick interesting, many diverse idea / Nice discussion  
very fun / Somehow, force of think just not very fun / More time was required / The discussion was a bit short to reach conclusion. / Shame experience turn other / Often in similar discussion it's good to give clues or directions, to take in order to get more productive results in the short time / Good discussion

Q10. 特別講演②：細田一史先生



[具体的なコメント]

英語が未熟だと、何を言っているのか雰囲気しかつかめないと思います。国際交流の場なので、日本語でとは言えないですが、講演の意義があるのかなと思いました。 / 少しディスカッションが長すぎた気がする / 長かった。途中で休憩をはさむべき / 昼食後なのが少し疲れやすかった / よかったです / 興味ある内容だった / 知っていることが半分くらいあった / もっと実際に行っている融合研究の話がききたい

The paint was really obvious and could have been discussed in just 20 minutes. He was really random. / Good enough / very big picture, excellent

I struggled for understand, talk could have been much short with come info

Interesting professor. I would have liked a bit more interactive presentation

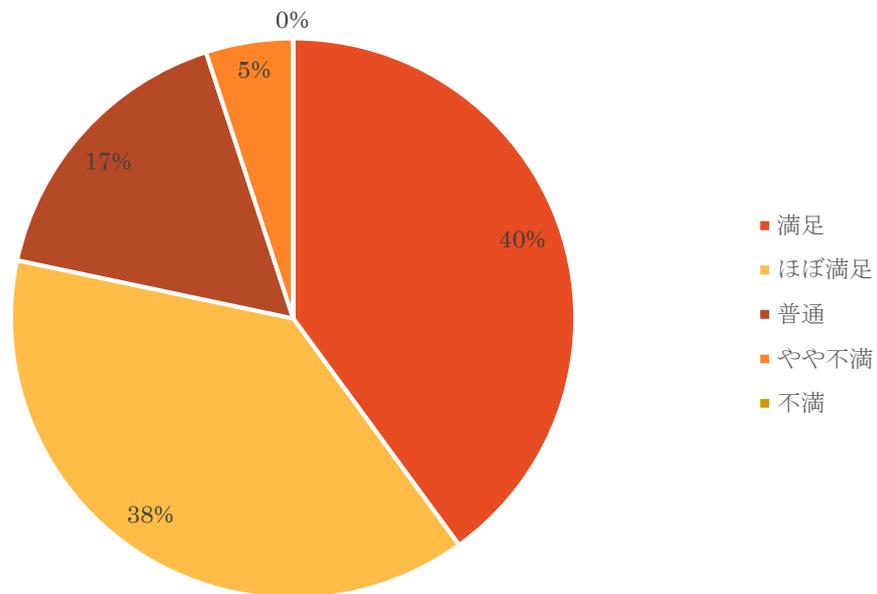
Difficult to understand / Relevant, but can be more realistic. / Interesting

Ideas aren't given into a specific order, so I was a bit confused.

The lecture was funny and provided interesting ideas. / Shaming his viewpoint

Too much time spent in the same point. It wasn't clear.

## Q11. 合宿全体の満足度



いろいろ大変だったけど参加してよかった / ポスター発表に満足いったから / 夜にしっかりと交流できた / 楽しかったが、もっと自分の高められる取組の仕方があったと思う / 外国人と触れ合うのは楽しい / とても楽しかったです / たくさんの友人ができて楽しかった / 最高でした / 研究科の同期と仲良くなれた / 英語をもっと学んでからもう一度参加したい / エクスカージョン行きたかったです。 / ごはん少ない / 英語を話すのをさけてしまった / 少し忙しいプログラムだったが楽しかった / 自分の英語力のなさのせいで、積極的に参加できなかったが、機会は十分に与えてもらえたと思う / とても充実した三日間でした / 今まで話したことなかった阪大生や、外国人と話せてよかった

Participants were better than last year. Let's keep on the something next year. It is not enough to go on with only FBS students / Great organization

Very impressed / It was enjoyable overall. I would probably have again more at an eather stage of my PhD. / Very good, with some room for improvement

Too long for only discussion / It was intensive but interesting experience

Nice overall, but we need more activities

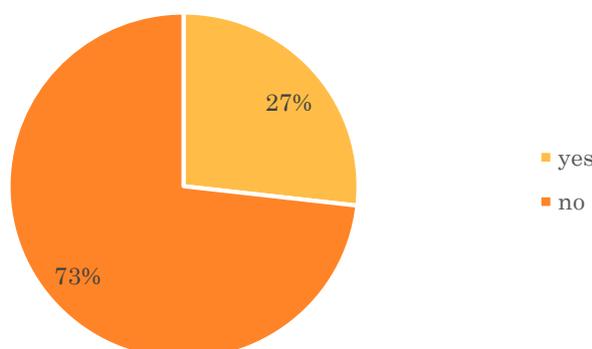
I enjoyed it all! Great, nice place and nice people. I just was a little bit tired because have programs maybe until 9:00 pm is too much. / Nice

To be more productive maybe facilitate topics more as course up with problems to tackle in advance. Then the euteome may activity he realistic or useful

Good overall. I think that shorter discussions would improve the retreat slightly

It was great! / Great / :)

## Q12. 今の合宿スタイルを変えるべきか



一泊二日の方が参加しやすいです / わざわざ合宿ではなくても学内でもできる  
ディスカッションよりも、研究発表を通し国内外の様々な研究を知る、自分の研究を発信する  
ところに重点を置いた方がいいのある交流を図れると思う。

時間配分。休憩の取り方などを考え直してほしい。また、留学生と研究以外の話のできる場が  
ほしかった。 / 参加者にアンケートをとるとか、やらされている感じが少しあった。

It was really cool to be in a traditional hotel but we were obligate to have food. We  
were not used to and we couldn't buy anything near.

There should be more lecture sessions more break-time.

The special lecture should be improved and has a better structure and content

The special lecture should be different discussions turned out in non-sense too often  
communication problems

Put dinner a bit later (around 7:00 pm) : Have more activities (not only discussions  
& lecture) maybe designing a poster for new fused ideas & have a competition for  
that.

## Q13. 付け加えたら良いと思うプログラム

互いに文化を発表できるような場 / 誰もが参加者の半分以上の人と話せる、かかわれるような  
もの / レクリエーション / 肝試し / フリートークとか、ゲームのような遊びのプログラムが  
あってもよいと思う / もう少し専門的なこと / ポスター発表はもう少し長くてもいい / プ  
レゼント交換会 / もう少しいろんな人と交流を持てるようなイベント / 自己紹介 / ショート  
プレゼン / 外国人との雑談タイムを設けると、日本人学生がより交流しやすくなる

Cultural introduction of Japan / lecture about improving communication skills

Game such as trump, exercises / debate.

**Discussion of differences in scientific communicate between countries.**

Team building exercise. Maybe deviding into teams of 4 to solve a logic problem?

Reduce the time during the discussion and increase the break time is great.